

複数表現あれこれ

相 沢 輝 昭

芭蕉の名句と、そのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）による英訳——

古池や蛙飛びこむ水の音

Old pond--frogs jumped in--sound of water.

日本語の「蛙」が、英語では複数形“frogs”で訳されている。何匹もの蛙がポチャン、ポチャンと……？

もっと理解に苦しむのが、ルイ・アームストロング歌うところのアメリカン・ポップス“*What a wonderful world*”の一節だ。

I see skies of blue and clouds of white.

はて、“skies of blue”とは？ たしかに空にはいろいろあろうが、青空となればひとつではないか？

日本語の名詞は変化しないが、英語には単数形と複数形がある。さらに、複数形の機能も一通りではない。目下の疑問に答えるならば、個数の複数に加えて回数の複数がある。上例は、じつは、時間軸に沿う回数の複数を表わしているのである。アームストロングは青い空を「何度も」見ると歌い、ハーンは蛙が「何度か」飛び込むと聞いているのだ。なるほど、何匹もの蛙がポチャン、ポチャンと同時に飛び込んで風情がなかり。かといって、ポチャンと1回きりでは寂しい。ポチャンと音がし、しばらくあって、またポチャンと——、これでこそ名句である。先人たちも見抜いていた、支考は「蛙の水に落つる音しばしばなれば……」と書き、去来は「庭の古池を、折々蛙のづぼんづぼんと飛込む音……」と書いている。そこのところを、ハーンは英語の複数形を使って楽々と表現したと言える。ちなみに、“clouds of white”は、個数の複数および回数の複数を表わしているのであらう。

また、M. ピーターセンの『続・日本人の英語』（岩波新書）には“Blue skies”というタイトルの歌が出て来る（Irving Berlin, 1927）。そこには、こんな下りがある。

Blue skies shining on me. (頭上に輝く青い空)

Nothing but blue skies do I see. (青空のほかはなんにも見えない)

そしてピーターセンは、これを、「時間の流れを意識して空を複数形にしたもの」と説いている。

フランス語の複数形になると、まことに多彩。鷺見洋一先生は「名詞を好むフランス人は、とりわけ抽象名詞を、手を変え品を変えて使いこなすのが得意」とおっしゃる。

1) 具象的事物を表わす

beauté (美) → des *beautés* (美女たち)

douceur (柔和) → des *douceurs* (お菓子)

2) 反復の複数性を表わす

Elle parlait maintenant avec des *reticénces* singulières.

直訳：彼女は今や特異なほのめかしをもって何度か話した。

適訳：いまや彼女の話しぶりには、ところどころ何かをほのめかしているような様子があった気がなった。

3) 種類の複数性を表わす

des soliloques où grondaient des *colères*

直訳：いろんな怒りがうずまいていたひとりごと

適訳：複雑な怒りのこもったひとりごと

ここには、同じ一人の人間の心に生起する怒りの感情のさまざまなニュアンスが表現されているという。そのため、適訳では、あえて原文にない「複雑な」が補われている由。

4) 主語の複数性を表わす

Jamais deux *jeunesses* n' avaient été aussi différentes.

適訳：二人の人物がこれほどまでに対照的な青春を生きたためしはかつてないことであった。

“deux *jeunesses*” を 1) と解釈して「二人の若者」と読んではならないとされる。微妙で難しいところ。

日本語では「たち、ども、ら、がた」などの付属語を付けて複数を表現する。膠着語たる所以であろう。複数形は、一般に、

apples = apple1 + apple2 + apple3 + …

books = book1 + book2 + book3 + book4 + …

のように、似たものをまとめたものだが、日本語ではまとめる範囲が広い。たとえば、

女たち = 女1 + 女2 + 女2の子供 + 女3 + 女3の子供1 + 女3の子供2 + …

太郎たち = 太郎 + 次郎 + 三郎 + 四郎 + 五郎

ときに、

太郎たち = 太郎 + 次郎 + 愛犬ポチ

とも、

代名詞の複数とは普通名詞の複数とは趣を異にするが、日本語ではやはり「たち、ども、ら」などを付けて表現する。それで、1人称複数代名詞「私たち」は、

私たち = 私 + 他者1 + 他者2 + …

のようになるが、まとめられる者の間の差異は大きい。

漢語や満洲語には、包括形と除外形という、1人称複数代名詞の興味深い使い分けがある。上述のように、

私たち = 私 + 他者1 + 他者2 + …

であるが、ここで、他者に聞き手を含めるか、それとも含めないか。従来、包括形は聞き手を含み、除外形は聞き手を含まないとされてきた。

早田輝洋先生の研究は、この通説を見直し、漢語ないし満洲語の1人称代名詞を体系化したものである。これを見てみよう。基本データは『崇禎本金瓶梅』と、時代的に近い満洲語訳。

何はともあれ、どちらかと言えば特殊な除外形がどのように使われたか、例文に当たろう。以下は早田先生による満洲語からの訳文で、問題の除外形はゴシックで示す。

1) 「**私たち**、春梅の小娘にも及ばないんだわ！」

除外対象 = 春梅 ≠ 聞き手

2) 「**俺たち**のことを無理矢理二度三度と通わせたあげく、老いぼれすべため、却って大きなことを言いやがって」

除外対象 = 老いぼれすべた（王婆） ≠ 聞き手

3) 「一人は大女房、一人は小女房、いまに二人で産みっくらすりゃ好いんだ。まともでなければバラバラのが産まれても好い。**私たち**卵を産まない雌鳥みたいな女はつぶして食っちゃったってかまやしないのさ」

除外対象 = 大女房と小女房 ≠ 聞き手

4) 「小廝を蹴るなら蹴ってもいいわ。どうして**私たち**まで一緒にして罵るのかしら」

除外対象 = 小廝 ≠ 聞き手

以上、どの例文でも、除外対象は通説とは異なり、聞き手ではない。

複数形「私たち」(=私+他者)の「他者」がどのような範囲になるかは、言語的直観ないしコンテキストによろう。「私」の想定範囲と多少ずれてもかまわない場合には(一般的な)包括形が使われ、除外したい者がいる場合、それを暗示するため(特殊な)除外形が使われる——、およそ、こんなところであろうか。この観点から上例を見ると、総じて、除外形を使う必然性は乏しいように思える。包括形でよろしいのではないか。

包括形と除外形の使い分けは、現代北京語にも(かなり簡便化された形で)残っているらしい。日本語には昔も今もない。が、よく考えると、たとえば「私たち」の指す範囲を、言い方の工夫で無意識のうちに調整しているフシはある。

かりに現代日本語に除外形があったとしたら、政治家たちが国会や政治討論会で使いまくるのだろうか。いや、奥ゆかしい暗示くらいではすまなくて、はっきり名指して怒鳴るのか。包括形と除外形の使い分けを調べる際には、そういった使い分けをしたがる人間心理にも目を向ける必要があるようだ。認知言語学の進展に期待したいところである。

最後に、吉行淳之介『軽薄対談』角川文庫（1973）から、吉行淳之介（東大英文科中退）と野坂昭如（早大仏文科除籍）の対話を――

野坂 ぼくには、サントリーのオン・ザ・ロックスをください。

吉行 おや、スをつけましたね。

野坂 これには前からスをつけてる。

吉行 それじゃ英語になっちゃうじゃないか。オン・ザ・ロックは日本語だけど、オン・ザ・ロックス
　　といや英語ですよ。

野坂 いや、これだけはずっと前からロックス。それからハム・エッグは、ハム・エッグスと……

吉行 でも卵1つだけだったら、エッグでしょう。

野坂 あれは1つでもエッグスという。正式には、ハム・エンド・エッグスです。

吉行 1つで、どうしてだろう。

野坂 知りません。そこまでは市川三喜じゃない（笑）。

吉行 おかしいな。1つで、どうしてスがつくのか。

野坂 白身と黄身があるからかな。

吉行 卵は将来親になって、子供をたくさん持つ可能性があるからか。

野坂 やっとエロチシズムに近い話題になってきましたね（笑）。

参考文献

- 池上嘉彦『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫，筑摩書房（2007）
早田輝洋「一人称代名詞の包括形・除外形の体形」、『言語研究』No. 125，日本言語学会（2003）pp.145-171
鷲見洋一『翻訳仏文法 上』ちくま学芸文庫，筑摩書房（2003）